

伝説の唐橋



写真T3-1-1 現在の瀬田唐橋

瀬田唐橋は勢多大橋、長橋とも称された、瀬田川の渡河地点に架けられた日本史上最も著名な橋である。壬申の乱(672年)の舞台として『日本書紀』に、764(天平宝字8)年の恵美押勝の乱に関連し『続日本紀』に表れるほか、数々の記録に登場する。特に平安時代以降は東海・東山両官道の通る橋として、日本最要の橋として、重要視されてきた。

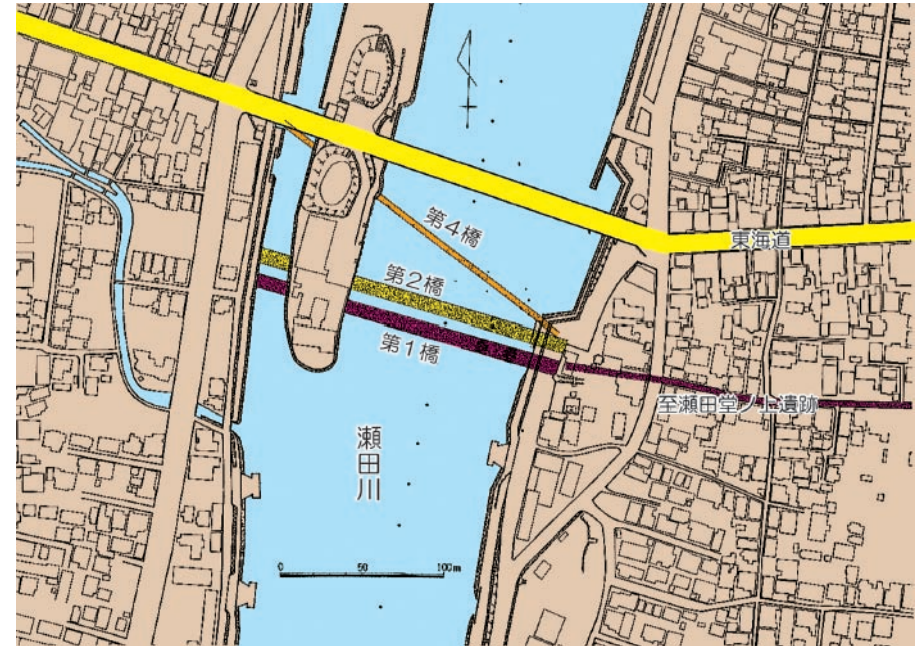
1988(昭和63)年に瀬田川の川底で行った発掘調査の結果、古代から近世に至る

様々な橋の遺構が見つかった。特に、現在の唐橋の下流約80mの地点から見つかった一番古い時代の橋は、出土した土器や部材の年輪年代から、壬申の乱の舞台となった勢多橋であることが明らかとなり、注目された。この橋の構造は、川底に横木を並べ、その上に六角形に組んだ部材を乗せ、各辺毎に橋脚を建て上げるという特殊な構造のものである。これとよく似た構造の橋が韓国慶州でも見つかり、架橋に際して、朝鮮半島からの渡来人達の技術が発揮されたことが、想像される。

さらにこのやや上流からは奈良時代頃、鎌倉時代頃の橋脚の遺構が見つかり、これら古い橋脚は、古代の勢多駅と考えられる瀬田堂ノ上遺跡の南を通り、近江国庁に至る古道を基点とし、

瀬田川に直行して架橋されている。これに対し、近世のものと考えられる橋脚の遺構が現在の唐橋の西詰めに向かい斜行して架橋されていることが確認された。このことから、現在の位置に唐橋が架橋されたのは近世以降のことであることが明らかとなった。

これら各時代の橋脚の周辺からは、唐橋の長い歴史と戦略拠点、祭祀の場等多様な性格を物語るかのように、刀や矢尻などの武器類を始め、鏡や貨幣、装身具、さらには鉄鉱石等、実に多くの遺物が出土している。



図T3-1-1 唐橋変遷図



写真T3-1-2 唐橋 第1橋台



写真T3-1-3 唐橋模型

瀬田の唐橋にまつわる昔話(俵藤太のムカデ退治)

近江の国でも最も有名な昔話の一つとして、藤太のムカデ退治がある。湖底にある竜宮城の乙姫様に頼まれた俵藤太は、三上山を七巻半もする大ムカデを退治した。今も橋の袂には、ゆかりの雲住寺と竜王宮秀郷社がある。(安田直次)

(文化財保護課)